
マリンスノウ

ごろー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マリンスノウ

【Nコード】

N0504M

【作者名】

ごころー

【あらすじ】

海の底に沈んだ、私の話。

（前書き）

殆ど散文詩に近いのではないでしょうか。作中に意味の分からない箇所が多くて、すみません。

夢が叶った、と言って良いのだろうか。

私は今静かに横たわっている。夜闇よりも暗い、海の底で。

水のひやりとした感触が頬を撫ぜる。こぼ、こぼ、と聞こえてくる水の音が実に心地良い。地上に、此処まで何事にも囚われない空間があっただろうか。私の胸は躍った。

然し。海の底の水圧は、私の身体だけでなく心までも押し潰す。哀しみが増え、鄙びてしまった心で、私はこうなってしまった事にすこし後悔をした。これから私は海の底で沈んでいたい、という浅はかな夢を抱いて眠るのだ。

果ての见えない天井から降ってくる、白い欠片がゆっくりと積もってゆく。私以外には誰も居ない、この殺風景な大地に。

マリンスノウ。

此れが地上の雪に似ているのか、地上の雪が此れに似ているのか。誰が付けた名かは知らないが、私は一種の倒錯の様なものを感じた。

——地上のひとは、海のことを母と言い、全ての還る場所だと言う。

実際のところ、そうであって、そうではないのかもしれない。

雪は私に覆いかぶさる様にして降ってくる。まるで幼い時分から使っていた毛布のように、それはゆっくりと優しく私を包み込む。

然し、それと同時に雪は私をこの世界から引き剥がしてゆく。視界が次第に白で覆われてゆくのだ。言い様のない恐怖。絶望感。それ等がゆっくりと私を包み込んでゆく。

全てを受け入れ、拒絶する。全てを生み出し、取り込む。其れが海なのだ。

視界は何時の間にか、ある一点を残して全て白で覆われていた。脳裏にふと一抹の思いが過る。

実に下らないことだ。地上のひとから為れば実に滑稽な話かもしれない。然し、此れは私が私であった最期の思いとなるだろう。私はもう、此の海に溶けてなくなってしまうのだ。それが実に恐ろしい。だからこそ、此の思いを此処に綴っておこう。

誰も居ない処で朽ち果てること程、虚しく、淋しいものはない、と。

”終わり”が始まってから後悔するのは、一等意味の無いことなのだから。

（後書き）

私は海の底には沈みたく無いなあ
…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0504m/>

マリンスノウ

2010年10月20日00時01分発行